

294

特275

391

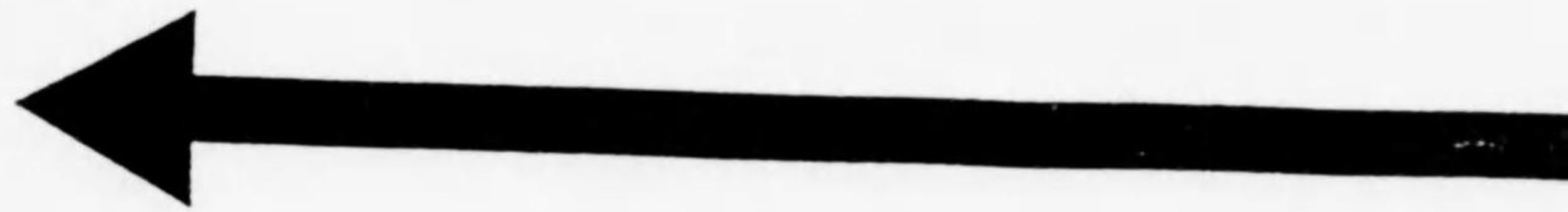
(院報號外)

今次事變の意義

法財人團 大阪國學院



始



特 275
391



次

一、はしがき……………一

二、塘沽停戦協定の成立から大使交換迄……………四

三、第一次北支事件以後……………一〇

四、我國の對支政策……………三



凡 例

此の冊子「今次事變の意義」は曩に大阪府情報委員會に於て編纂發行せられたものであるが時局認識の上に最も適切なる參考資料と信ずるので本院に於ても之を謄寫し院報號外として頒布することゝした各位の熟讀を乞ふ

財團 法人 大阪國學院

今次事變の意義

一、はしがき

七月七日夜、我が支那駐屯軍に屬する豊台駐屯部隊の一部が北平の西南約三里の蘆溝橋——マルコポーロの旅行記で有名な石橋で外人はマルコポーロ橋と呼んでゐる——北方で恒例の夜間演習を實施中、突如附近の宛平縣に駐屯する支那軍から數十發の射撃を受けたに端を發した今次の事變は、日を経るに従つて我方の不擴大方針にも拘らず、支那側の挑戰的行爲に依つて局面は擴大し、全支に亘る排日行爲は愈々熾烈化し、我が在留民は漢口を始め多年營々として築きあげた安住の地を涙を吞んで引き揚ぐるの已む無きに至つた。戦局も北支から上海方面に發展し、今や平和的解決の望は全く水泡に歸したのである。

抑々今次の日支紛争の依て以て來る根因は遠く且深いのであつて、大正の初期支那

に國民主義の運動が起つた頃迄溯つて説明すれば之を明らかにし得るのであるが、茲には滿洲事變以後の日支關係を述べて参考に資したいと思ふ。

昭和六年九月十八日、奉天の近郊柳條溝附近の滿鐵線の爆破に依つて勃發した日支兩國軍隊間の衝突は今更茲に述べる迄もなく全滿に波及し、日本と支那とは互に宣戰の布告こそしなかつたが、戦争と殆ど變りのない關係となつた。翌七年の一月には戦火は上海にも飛び、此處にも日支兩國軍隊の間に激しい戦闘が行はれた。上海に於ける戦闘は我軍の完全なる戦勝に歸し、同年五月五日兩國當事者間に上海停戰協定が成立するに至り、爾後支那は上海の附近に軍隊を駐屯しないことゝなつた。

滿洲に於ては戦場は南滿から北滿へと延びて、戦局は愈々擴大し、滿洲國の成立後も絶え間なく戦闘が繼續された。滿洲事變の最後の戦闘とも見るべきは所謂熱河肅清工作で當時承德を中心に熱河省一帶に占據して居た湯玉麟軍を撃退し、續いて餘威を驅り破竹の勢を以て萬里長城に迫つた。長城の關門古北口、喜峰口に於ては今次の事變の結果我軍の爲に壊滅せしめられた宋哲元麾下の第二十九軍の激しい抵抗があつた

が、難なく之を打ち破り長城を越へて北支に殺倒し、北平、天津は今にも日本軍の爲に占領されるかも知れないといふ形勢となつた。

當時此の方面の支那軍の總司令官は滿洲を追はれた張學良で、彼は天嶮を誇る熱河が、格別の戦らしい戦もなしに日本軍の手に落ち、次いで長城線の守すらも日本軍の前に一溜もなかつたので、事の意外に狼狽し頻りに南京政府に對して、財政上及軍事上の援助を懇請したが、結局宋子文が申譯的に北京に來たのみで、續いて北上した蔣介石は保定で張學良と會見、下野を勸告したので、張も三月十一日に下野の通電を發し、翌四月伊太利に向け出發するに至つた。

南京政府に於ては國民黨の元老たる汪兆銘を行政院長に任命して混亂せる時局の收拾に當らしむることとなり、汪兆銘は日本に對しては一面抵抗、一面和平、即ち當らず觸らずの政策をとることとなつた。他方從來日本側と關係の深かつた、我が陸軍士官學校出身の何應欽を北平に派遣し、彼を主任として、**軍事委員會北平分會**なるものを作り、熱河戦後の北支の事態收拾に當らしむることとなつた。

二、塘沽停戰協定の成立から大使交換迄

右南京政府の政策の轉換の最初の現はれは、昭和八年五月三十一日塘沽に於て、關東軍代表岡村參謀副長と支那側參謀次長熊斌との間に成立を見た**塘沽停戰協定**である。本協定に依り今日**冀東防共自治政府**の占めて居る地域の根柢をなす、所謂**停戰協定地區**、即ち支那人の呼んで戰區と稱する地域が成立したのである。即ち北は延慶、昌平から高麗營、順義、通州、香河、寶坻、林亭口、寧河を経て塘沽の北方蘆台に至る線の東方の地域が其れである。本協定の内容は

一、前記地域に支那は軍隊を駐屯せず、又絶對挑戰攪亂行爲を行はず。
二、支那側が本協定に違反せざる様、日本軍は飛行機其の他の方法に依つて隨時支那側を監視するを得る。

三、若し支那側が前記地域内で排日的挑戰行爲をなさないならば、日本軍は自發的に大體長城の線迄撤收する。

といふに在つた。

支那側では此の停戦協定に基いて我國と種々交渉を爲す便宜上から、六月十一日に黄郛を委員長とする行政院直屬の**政務整理委員會**なるものを北平に設置することゝなつたので、日本側は此の委員會を交渉の相手として懸案の解決に進むことゝなつた。先づ最初に出來たのは七月の初に政務整理委員會の委員の一人である殷同其の他と、岡村關東軍參謀副長との間に成立した**北平申合**と稱せられるものである。此の申合は其の後滿洲國と支那との間に鐵道、電信、郵便等の連絡を爲すに就ての基礎をなしたものであつて、大體の内容は

一、塘沽停戦協定に基き、日本軍が長城の線迄撤退すると共に、支那側は停戦地域を接收して支那に於て其の行政に當ること。

二、長城を挾んで滿洲國と北支とがつながつて居るにも拘はらず、其の間に交通もしないといふ様な事は面白くないから長城の内外を通ずる貿易、交通通信其の他文化的經濟的の連絡提携を促進すること

等である。

此の申合に依り支那側は第一に停戦地域の行政の接收に取掛り、昭和九年二月頃から次第に山海關、古北口其の他の長城の關門を接收した。各地點の接收に當つては、夫々の地點に於て日支間に接收に關する取極が出来たが、右取極は支那側が排日、反滿の行爲をなさず、且各種の社會的施設を圖ること等であつた。

第二に解決されたのは汽車の連絡の問題である。滿洲事變勃發迄北平と奉天との間には直通列車が通つて居たのであるが、事件の發生と共に中絶された爲旅行者に多大の不便を與へて居た。然し此の問題は日支兩國當事者の話合で事實上解決され、昭和九年七月一日から従前の通り直通列車の運轉が開始されたのである。

第三の問題は税關を置く問題である。元來税關は國と國との境に設けるものであるから、滿洲國と支那との國境即ち萬里長城に支那側が税關を設けることになる、支那側が事實上滿洲國の獨立を承認することゝもなり、支那としては重大なる問題である。此の問題も然し事實上解決され、税關の出張所か長城の各關門に設けられること

なつた。同時に滿洲國から支那に入つて來る品物に對する關稅に就ても、外國品と全く同一の輸入稅といふ譯にも行かず、支那側としては痛し痒しであつたが此れ亦便宜的方法が發見された。

第四に解決した問題は郵便及電信事務の連絡である。滿洲事變勃發と共に滿洲國を經由する歐洲と支那との間の郵便の連絡に就て種々問題が起り、又支那は滿洲國の郵便切手を認めず、且滿洲國成立後新たに作られた地名の消印のある郵便物の配達を拒絶したりした爲非常に厄介な状態が発生したのである。然し此の問題も結局昭和十年一月十日普通郵便物、小荷物、爲替等の取扱に關する日支間の協定が成立した結果事實上は解決を見るに至つた。續いて電信及電話に關しても便法が講ぜられる、ことゝなつた。

當時解決しなかつたのは、滿洲國と北支との間の航空連絡のみであり、其の他の懸案は前述の様に次々と實際上解決するに至つた。滿洲事變以來の暗雲も漸く晴れ間を見せ、此の機會に亘る日支兩國間のわだかまりも一舉に解消するのではないか

とさへ思はれた。

恰も昭和十年一月二十二日廣田外務大臣は帝國議會に於て、極めて率直に日支關係の好轉に就て左の如く述べたのである。

「帝國政府は支那が一日も速かに其の安定を恢復する一方、東亞の大局に覺醒し、帝國の眞摯なる期待に合するに至らんことを、衷心より希望して已まぬのみならず、我國と致しましても其の善隣として、且東亞の安定勢力たる地位に鑑みまして、之が實現の爲、一層努力したいと云ふ方針を持つて居るのであります。而して、從來兩國の間に多年懸案たりし各種の問題が漸次解決を見、支那國民が次第に帝國の眞意を諒するの傾向あることは、帝國政府としても、如實に之を認むるに吝ならざるものであります。我方に於ては、今後右傾向の促進に遺憾なきを期すると共に、支那側に於ても右に對し一層の協力を爲さんことを望む次第であります」。

右廣田外相の演説は支那に對して好影響を與へたものゝ如く、二月一日蔣介石は全支那の各新聞紙に對して非公式の談話を與へ、右談話は翌二月二日の各紙に掲載され

たが、其の内容は大體左の通りであつた。

「今回の廣田外相の支那に關する演説は誠意より出でたるものと認められる。支那國民の一部に反日運動が発生し、政府は絶へず之を制止せんと努めて來た。惟ふに兩國が平等の原則に違ひ相互に誠意を披瀝してこそ始めて疑惑は一掃され、光明の途を進むを得る。支那の反日感情及日本の對支優越態度を共に改善することが親善の途である。依て全國の同胞が一時の衝動を抑止し、反日行動を停止して誠意を表せんとすることを希望する。然らば日本も亦誠意を以て應じ得ること、信ずる。」

續いて、汪兆銘も略々同趣旨の演説を爲し、三月に入つては、南京政府は排日取締の命令を發する等、支那側も日支關係の打開に就て漸く誠意を示して來た様に見へたのである。

此の支那側の態度の好轉に關聯し起つたのが公使館昇格問題である。支那は多年列國との間に大使を交換したい希望を持つて居り、我國に對しても屢々右希望の申入れがあつたが、日支關係の實情が其の實現を阻んで居たのであつた。然し兩國の關係も

前述の様に好轉する氣配が見えたので、我國は愈々公使館の昇格を斷行することとなり、昭和十年五月十七日附を以て、日支兩國は夫々公使館を大使館に昇格する旨を發表したのである。我國は、昇格を決定するや、英、米、佛、獨の四國をも勸誘したのであるが、結局右四國も我國に倣つて大使を交換することとなり、南京政府は我國の好意に對して之を大いに多としたのである。

三、第一次北支事件以後

塘沽停戰協定から大使の交換迄の二年間は、日支兩國の關係が次第に常道に立ち返りつゝあつた時代で、多年我國上下舉つて待望し、且其の實現の爲努力を惜しまなかつた日支の提携、東亞の安定の大理想も或は遠からず實現するのではないかと思はれた。謂はゞ希望に充ちた二年間であつた。

然し北支事件の發生及其後の形勢は、日本國民の希望が結局一片の夢に過ぎなかつたのを教へたのである。元來南京政府と異體同心の仲である國民黨は、其の成立の

經緯から見ても、排外思想の鼓吹に依つて興つたものであつて、極端に謂へば排外運動なくしては國民黨の存在は考へられないのである。昭和三年の山東派兵頃から、右排外運動は常に我國に向けられて來たことは周知の通りで、特に滿洲事變の發生以來南京政府は表面日本との提携、親善を唱へつゝ、蔭に廻つては執拗に排日氣勢を煽つて、支那の統一及其勢力の強化に之を利用して來たのである。即ち政府要路の人々が率先して日本に對する復仇を説き、日本に對する復仇の爲には軍備の強化が先づ以て第一であり、又國內の統一が緊急であることを宣傳して廻つたのである。それだけでなくも幼稚園、小學校の頃から徹底した排日教育で養はれた支那國民のことであるから、南京政府の以上の様な政略は非常な成功を収め、無辜、文盲の大衆は別として、指導階級、知識階級に屬するものは擧つて排日熱に酔つたのが實情であつた。従つて一片の排日取締の命令で排日が絶滅する道理がなかつたのである。

特に注意しなければならぬことは**藍衣社**の存在である。藍衣社は滿洲事變勃發の直後、國民黨が全く無力であるのに憤激した支那陸軍の中堅將校連中が結成した祕密結

社であつて、其の本來の目的は、支那に眞の國民精神を發生せしめ、強固なる國家組織を興へやうといふに在る。社員の殆ど全部は黃埔又は南京の軍官學校出身のもので社長として軍官學校長たる蔣介石を戴き、飽く迄蔣介石を中心として支那を統一しやうといふ堅き決心を有する團體である。有名な新生活運動を計畫し、且之を實施しつゝあるのは藍衣社だと謂はれ、滿洲事變以後の支那の統一、蔣介石政權の強化に多大の貢献をなしたのである。藍衣社が前述の大目的貫徹の爲に排日思想の宣傳を選んだのは異とするに足らぬ。社員一同は塘沽停戰協定以後の日支關係の好轉に非常な不満を感じ、機會ある毎に其の實現を妨碍しつゝあつたのである。果せるかな**第一次北支事件**は我方の徹底せる調査の結果、裏面に於て藍衣社が絲を引いて居ることが明らかとなつた。

昭和十年五月二日及三日、天津で親日的新聞を經營して居つた胡恩溥、白愈桓の兩氏が相次いで何者かに暗殺された。在天津帝國總領事館に於て、事件の背後關係に就て、徹底的に探查した處、前記藍衣社及事實上其の支配下に在る軍事委員會北平分會

の政治訓練所並憲兵第三團といふ様な、中央政府の機關或は此等機關に關係ある人物の所爲なることに關し確證を得たので、我方から平津地方の支那側當局に對し、北支に於ける排日の取締並に今後の保證、責任者の處罰等に就き嚴重なる要求を提出した處、支那側も遂に我方の要求の全部を其の儘承認することとなつた。之が即ち今次の事變に關聯して問題となつた梅津・何應欽協定の基礎をなすものであつて、第一次北支事件の結果

- 一、河北省主席于學忠は其の職を免ぜられて、商震が之に代り、
- 二、中央軍及于學忠軍が河北省から撤退し、
- 三、河北省に於ける藍衣社は解散せられ、憲兵第三團、政治訓練所等の排日的團體は他に移駐せしめられ、其の結果排日團體の活動が困難となり、
- 四、從來の河北省政府所在地たる天津は行政院直轄の特別市となり、
- 五、保定が河北省政府の所在地となり、
- 六、更に六月十日には國民政府の所謂邦交敦睦令なるもの即ち「國民政府に於ては

從來より外國との國交を改善しなければならぬ事を痛感して居るのであるが、國民も能く外國との國交を重んじ、殊に隣邦との關係を良好ならしむるに努むべき」旨の命令が發せられたのである。

皮肉にも右邦交敦睦令の發せられた翌十一日に又もや北支に於て不祥事が發生した所謂東柵子事件が即ち之で、事件の内容をかいつまんで述べると、熱河省内の東柵子といふ所で滿洲國の縣參事官が、宋哲元の第二十九軍に屬する部隊の爲狙撃せられたのである。之より先宋哲元は我方に對して、將來絶対に滿洲國の領域は侵さず、若し侵せる場合は日本側は之を挑戰行爲と看做すといふことを約束して居つたので、本事件の結果、宋哲元は察哈爾省主席を辭し、同時に第二十九軍の軍長たる資格をも失つたのである。更に又關東軍の土肥原少將が察哈爾省主席代理秦德純と交渉した結果、六月廿七日に至り土肥原秦德純協定が成立し、塘沽停戰協定地域の西方に續く地域から第二十九軍が撤退し、塘沽停戰地域と同様、保安隊に依つて治安の維持される地域が出現したのである。

東柵子事件が前述の様に一應解決するや、又復排日事件が勃發した。即ち昭和十年八月四日、灤州の停車場で、塘沽停戰協定地域内の保安隊の隊長であつた劉佐周なる者が、支那人の爲狙撃されて即死し、偶々傍にあつた帝國の憲兵が重傷を負つた事件で、**第二次北支事件**と呼ばれる事件が即ち之である。事件の真相に就て我方で徹底的に調査した結果、北平政務整理委員會より派遣せられて、停戰地域の行政を擔任して居た二名の委員中の一人陶尙銘（他の一人は殷汝耕）が此の事件に關係して居ることが略々明となつたのである。尙又事件發生の際、犯人が現場に遺留した爆彈等に依り事件の背後に藍衣社が介在して居ることも大體確實となつたのである。

以上の三事件の發生に依つて我國の上下は、日支國交の好轉に對する期待が大きかつた。支那の排日運動を益々深刻化せしめることゝもなつた。排日的テロ事件は北支のみならず、全支に波及し、十一月一日、過去二年半の間専ら日支國交調査の衝に當つて居た汪兆銘が、南京に於て一暴徒の爲狙撃せられて重傷を貪ひ、行政院長兼外交部

長の職から退くの已むなきに至り、次いで十二月下旬、彼の腹臣にして、從來日本と關係の深かつた外交部次長の唐有壬が上海佛租界の自宅で狙撃せられて即死したのである。

此れより先同年七月にモスコイで開かれた**第七回コミンテルン大會**は、共產主義運動當面の敵として、日本、獨逸及波蘭の三國を選び、之等三國に對して其の攻撃を集中する旨を決議し、同時に所謂新戰術を採擇したのである。右コミンテルンの新戰術とは、それ迄犬猿も營ならざる間柄であつた社會民主的諸團體、即ち第二インターナショナル系の團體に對して、從來の政策を一擲して、之に積極的に働きかけ、之と共に同して前記三國に當らうといふもので、其の結果生れたものが、**人民戰線運動**である。コミンテルンの新戰術は又社會民主的團體のみでなく、汎ゆる階級に對して働きかけるもので、右翼の國家主義的團體も其の選に洩れぬのである。

歐洲では人民戰線運動が佛蘭西及西班牙に於て實を結び、遂には西班牙内亂に迄發展したのであるが、支那でもコミンテルンの暗中飛躍は着々として成功を収め、抗日

人民戦線の結成となつて現はれたのである。其の結果日本人に対するテロ事件が續發し今次事變發生迄に重なもの、みても左の九件を數へることが出来る。

一、上海中山事件

昭和十一年十一月九日、上海特別陸戦隊所屬の一等水兵中山季雄が射殺された

二、汕頭事件

昭和十一年一月二十一日、領事館警察署の角田巡查が出勤の途中狙撃され、即死した。

三、上海萱生事件

七月十日、上海在住の邦人商人萱生某が狙撃され、即死した。

四、長沙事件

八月二十日、邦人經營の一旅館(都甲陸軍武官宿舍)玉突場に爆彈を投じたものがあり、玉臺其の他を破壊し邦人一人負傷した

五、成都事件

八月二十四日、大毎記者渡邊洗三郎、上海毎日記者深川經二、滿鐵上海事務所員田中武夫及漢口在住の商人瀬戸尙の四名が成都に滞在中、學生を中心とする排日の暴民に襲撃され、前二者は撲殺、後二者は重傷を負ひ、所持品は何れも悉く掠奪された。

六、北海事件

九月三日、二十數年間北海に居住し、支那婦人と結婚して居た中野順三が排日の暴民の爲襲撃され、死亡した。

七、漢口事件

九月十九日、日本租界境界線附近で勤務中の總領事館警察署の吉岡巡查が白晝狙撃され、即死した。

八、上海田港事件

九月二十三日夜、上海共同租界内を散歩中の出雲乗組員水兵三名が支那人の爲後方より狙撃され、一等水兵田港朝光は即死、一等水兵八幡良胤及二等水兵出利葉義已

は重傷を負った。

九、上海高瀬事件

十一月十一日笠置丸船員高瀬安次は射殺された。

以上の中でも特に暴虐を極めたのは成都及北海の二事件で、共に共産黨と極右の排日運動者とは結合して、民衆を煽動した結果である。元來國民黨と共産黨との關係は決して第七回コミンテルン大會に始まった譯でなく、大正十三年以來のことである。同年正月廣東で開催された國民黨第一次全國代表大會の決議に基いて、國民黨が北方軍閥打倒の爲、所謂聯蘇容共政策を採用してからのことである。國民革命軍即ち國民黨の軍隊が北方の軍隊に對して、着々と成功を収めたのは實に此の國共合作（國民黨と共産黨の共同工作）以來で、翌々年の十月には蒋介石の指揮する國民革命軍は揚子江沿岸に進出し、昭和二年正月には國民政府は武漢に移つたのである。當時革命軍の軍事顧問としてソ聯邦のガロン將軍（現在極東軍司令官として我國にも名を知られて居るブリユツヘル元帥）があり、國民政府の最高政治顧問として、同じくソ聯邦のボロ

チンが居た。武漢政府は全く共産黨の爲に牛耳られ、昭和二年三月の國民黨中央全體會議に於ては、遂に蒋介石の一切の公職を罷免するに至つたのである。同年八月結局國民黨右翼派のクーデターが成功し、ソ聯邦側の顧問は何れも追放され、表面聯蘇容共政策は清算されたが、國民黨に喰ひ込んだ共産黨の勢力は容易に一掃されず、他方赤化の魔手は支那各地に延びて、或は中國紅軍となり、或はソヴェト區となつた。滿洲事變後、汪兆銘の一面抵抗、一面和平の方針に基いて、日本との妥協を圖つた頃は、國內に於て共産軍の征討に相當の熱意を來したのであるが、昭和十一年末の西安事件以後前述のコミンテルンの新戦術もあり、國民黨と共産黨との妥協が急激に進行し今迄比較的鳴りを静めて居た共産黨系の分子の活躍が急に目立ち、中國共産黨の領袖周恩來等は時を得顔に或は南京、或は廬山に於て、南京政府の要人と屢々會見して居たのである。斯くして支那が一路排日に向つて邁進したのは當然で、北支に駐屯して居た二十九軍の將士の間にも排日氣勢が日増しに高くなつたのである。

四、我國の對支政策

我國の對支政策は屢々政府に依て聲明せられた通り、日支兩國の共存共榮を圖り、以て東亞永遠の平和を確立せんとするに在る。此の政策は決して近年に至つて出來たものでなく、明治維新以來我國の堅持し來つたものである。

大正十四年支那の關稅改訂に關する會議が北平に於て開會された時、我國は列國に率先して支那の關稅自主權を承認するの襟度を示したのも、當に右對支根本方針の表現に外ならぬのであつて、我國は支那に於ける國民主義の擡頭に對しては同情の眼を以て眺め、支那が統一ある國家として甦生するの日を待望し、常に援助を怠らなかつたのである。然るに支那が此の帝國の政策に報いたものは何であつたか、曰く南京事件、曰く濟南事件、曰く日貨排斥、そして遂には關東州租借地の回收すら要求し、帝國の滿洲に有する權益の蹂躪すら敢へてするに至つたのである。

滿洲事件の發生が以上の様な支那側の厚顏無恥なる忘恩行爲の結果であつたことは

三三

昭和十一年一月二十一日廣田外務大臣は帝國議會に於ける演說に於て所謂對支三原則を聲明したのである。右三原則とは

- 一、排日の徹底的取締と日支提携に對する積極的努力を惜しまぬこと
- 二、滿洲國に關しては、支那が滿洲國に正式承認を與へることが究極に於て必要であるが、それ迄の間に於ても滿洲國の獨立を默認し反滿政策を停止し、先づ北支方面に於て提携を圖ること、
- 三、赤化勢力東漸に對する共同防衛、

であつて、爾來帝國政府は右方針の具體化に關して南京政府と折衝を續けて來たのである。殊に昭和十一年八月成都事件の發生後に於ける日支間の交渉は、専ら右三原則を根本方針として進められたのであるが、排日意識に酔ひ、赤化の魔手に踊らされて居る南京政府要人以下支那の指導階級及知識階級は、一向帝國の誠意ある交渉に耳を傾けず、同年十二月に至つて遂に交渉を打切るの已むきに至つた。

斯くして日支關係は惡化の一路を辿り、偶々蘆溝橋に於ける支那軍の不法射撃に端を

今更茲に説く迄もないことである。帝國は滿洲國の成立以來、其の育成發展に貢献することをして、我國民に與へられる一大命なりと信じ、滿洲國の領土を侵し、其の獨立を脅威するものに對しては實力を以ても其の排除に當る堅き決心を有して居る。さればこそ、國際聯盟に於ける各種の干涉壓迫に對しても敢然之に抗して來たのであつて、今や幸にして、世界の輿論も帝國の公正なる立場を理解し始め、國際聯盟に於ける滿洲國不承認の決議にも拘らず何人も滿洲國の獨立を疑はなくなつたばかりでなく之を承認し或は事實上承認してゐる國も尠くないのである。然るに支那に於ける國民革命派とコミンテルンのみは依然として、滿洲國の存在を執拗に否認せんとして居り機會あらば日本と一戦し、彼等の所謂東北四省の奪還を圖らんとして居る状態である若し斯る状態にして放置されんか結局東亞の平和は攪亂されること火をみるより瞭らかであるから、帝國は、滿洲國と接壤する地方、即ち北支の地を支那主權の下に於て兩國間の緩衝地帯として保持し、日滿支三國の提携を先づ此に具體化せんことを支那に對して要求し來つたのである。

終